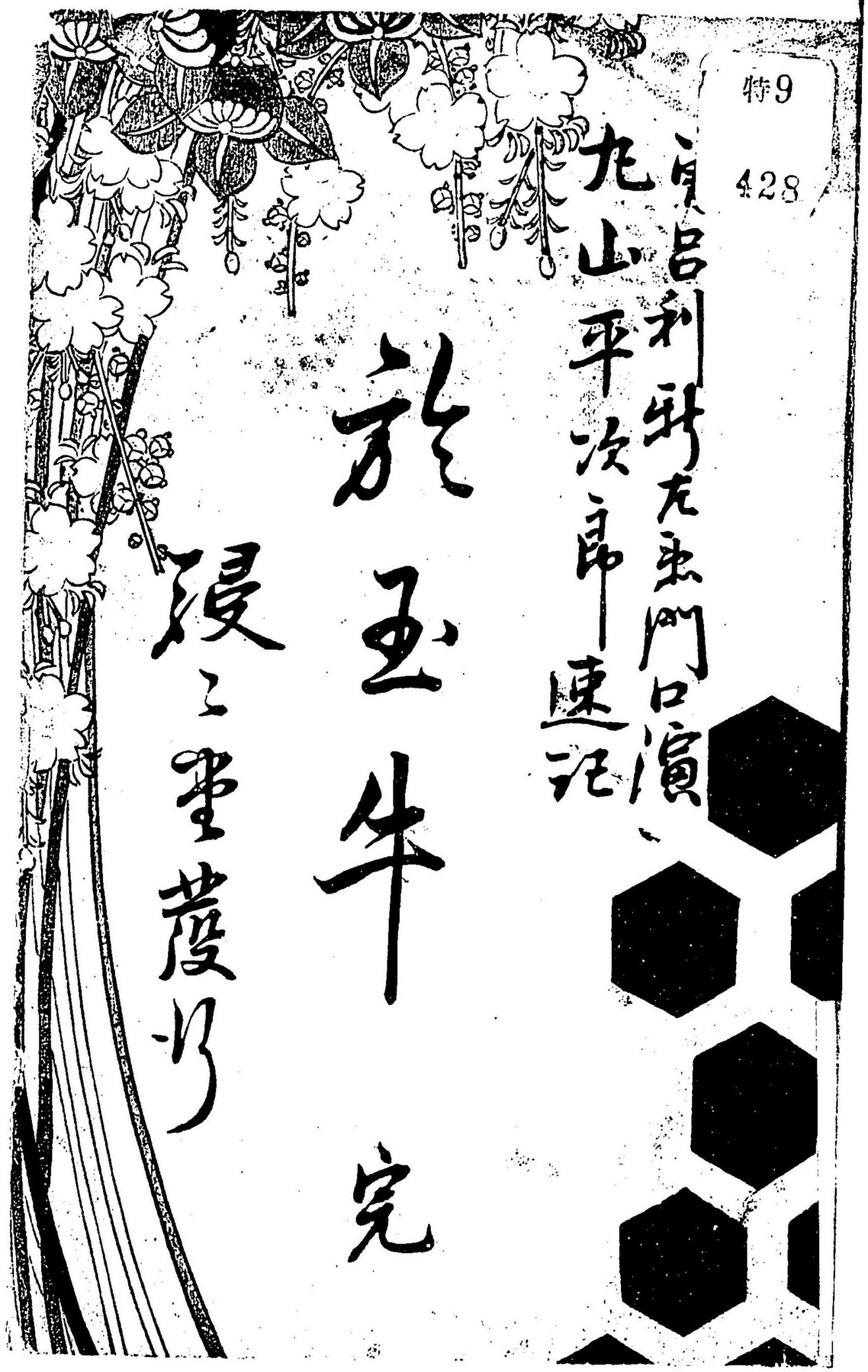


特9
428

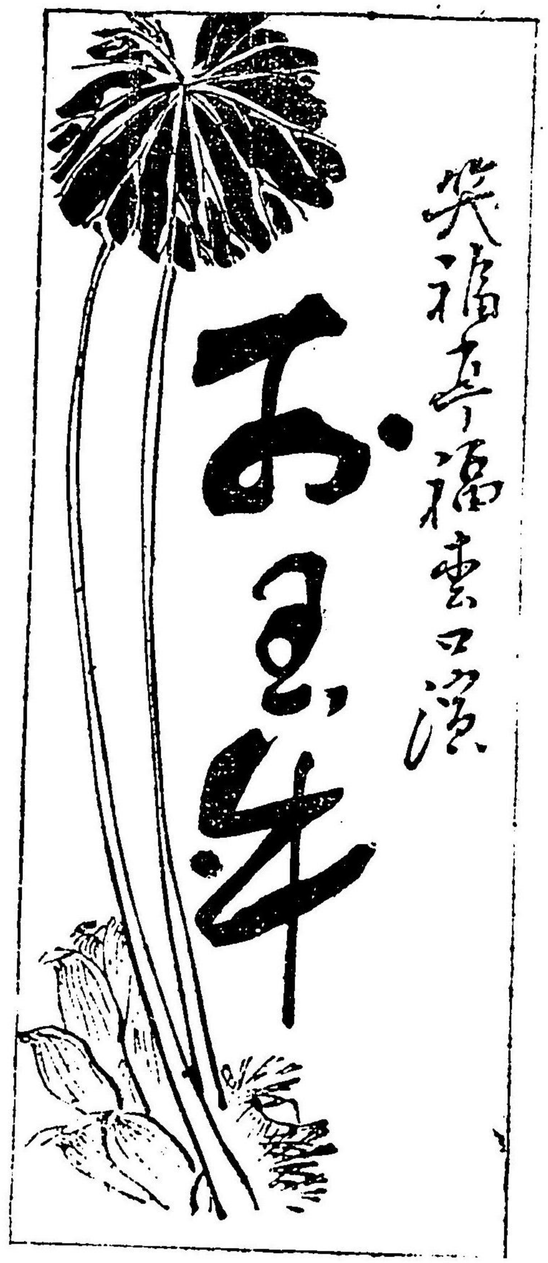
097898-000-1

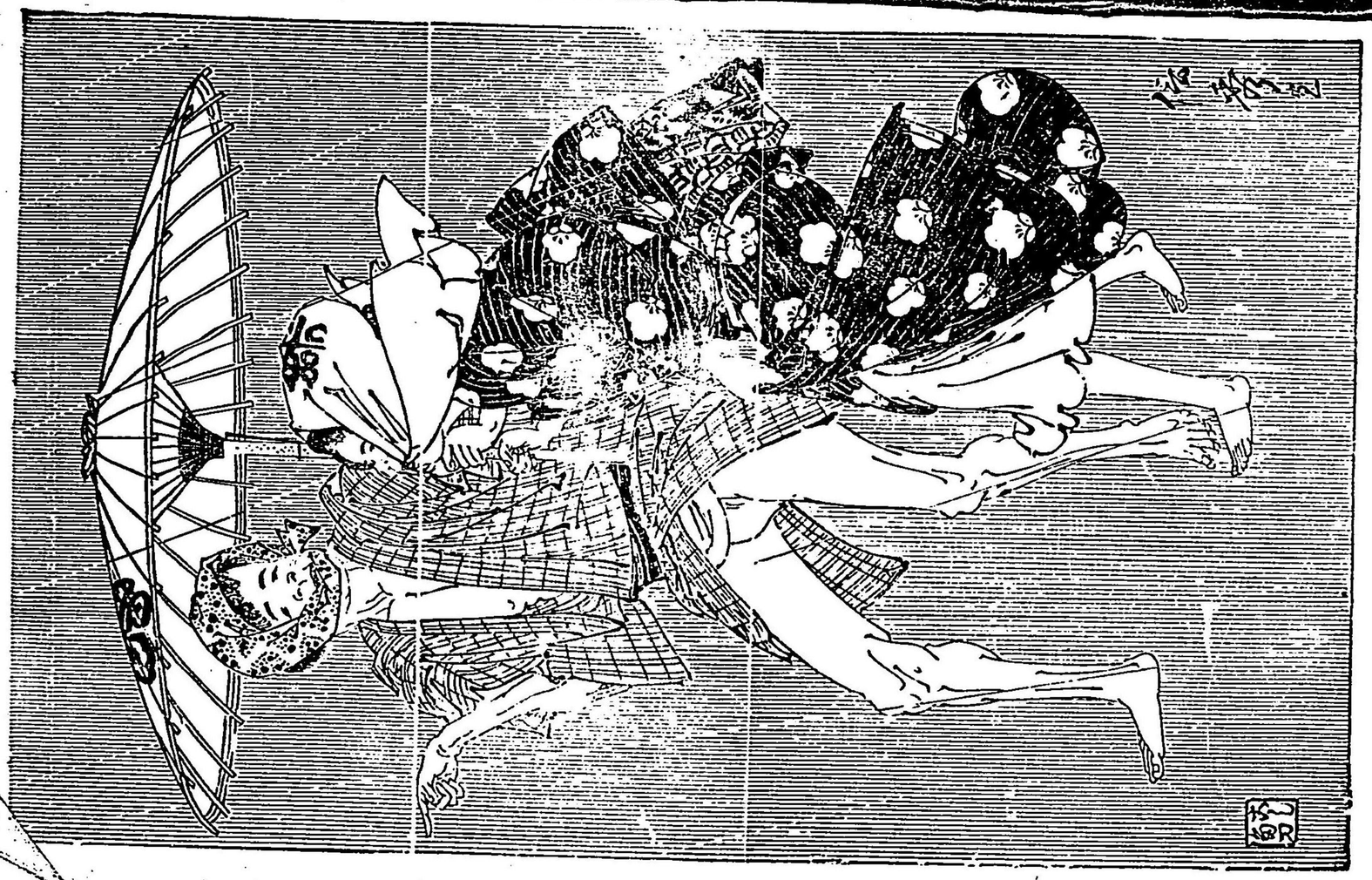
特9－428

お玉牛

曽呂利　新左衛門／口演

M27
DBT－0058


笑福亭福笑
福笑



428

於玉牛

第二世　曾呂利新左衛門口演
丸山平次郎速記
石井貞次郎復文

其上

是は曲亭馬琴が作を爲られた、累物語に昔の人が作へ置きましたのをば、者上げます、滑稽落語に上げます、之は紀州の堀越の觀音樣の片邊ゐ堀越村と云ふ所がございます、此堀越村と云ふ所は、戸數の大層ある處ではございませんが、此所にお累と云ふ寡婦がございます、所謂累と云ふのは累ねと云ふので、

デ、此村に與次兵衛と云ふ獨身者がおざりまして、昔から申してる通り、女寡に花が咲く、男鰥に蛆が生くと申してござりまするが、成程婦人と申しますると、何歳何十に成りましても、云ふに云はれぬ所に愛嬌の有るもんでござりますから、一人住みをして居ますると、又世話をして見やうかと云ふ人が出來ます、と云ふのは茲に一ッ結搏な處が有りますから、男子の方では如何も年を老ッて、一人者で居りますると、今日の方向に困る樣な事に相成りまするが、女子で有りましたら、昔から濱立俗に隱賣女と云ふのです、顏に三文がとこ白粉を塗ッて、材木の間にヒョコリッと立ッて、往來の人の袖を引張ッて、お遊びなさらんかいナ、と云ふて情けを商ふて一貫でも二貫でも錢儲けを致しますが、男子は明日肩に天秤

棒を置く事は出來ず、如何する事も出來ん樣に成りましたと云ふて、顏に白粉を塗ッて材木の間に立ッて、往來のお女中の袖を引張ッて、姐さんれ遊びあさらんかいなと云ふて、誰ぞ遊ばうかと云ふお女中は、豊夫やござりますまい、だから女と云ふ者は、結搏な者でござりますけども餘り女もゑらう賞められません、擲りやア泣くし殺しやア怪るし、とんと仕樣のない者でござります、偖て此れ累は獨身者で居りまする、丁度與次兵衛も獨身者で居りますので、之をば此所のれ庄屋樣が

「汝等二人は實に能う稼ぐ者で有るから、汝等を二人夫婦にして遣ッたら、立派な者に成るであらう」

ト云ふ見極めを付けまして、二人の者へさして話しを致しますると、双方大いに喜びまして

同人「何分にも宜しうお願ひ申します
ト云ふので此お累と與次兵衛をば、夫婦にお庄屋様の媒人で致しました、然う成りますると双方共に、働らくの働らかんのぢやございません、朝には星を頂いて宅を出で、夕には星を戴いて宅に歸り、二人ゞ稼ぎますので僅々一二年過たぬ中、ドッサリと財産が出來まして、田地田畑の少々も買ふ樣な事に成りました、夫婦は喜んで金錢の出來るのが面白さに、無暗に稼いで居りましたが、或日の事農業を仕舞ふて宅に歸り、囲爐裡に火を拵へ夫婦は差し向ひに成ッて

與次「ナア嬶よ、マア和女と乃公と、お互ひに獨身者で不都合な生計を爲て居たが、れ庄屋様の媒人でマア和女と夫婦に成ッて、和女が稼いで呉れるので、乃公も斯うやッてからに稼ぎ出して、マア是だけの氣樂に暮せる樣にあッたと云ふのも、皆んなお庄屋様の御庇蔭だ、お庄屋様の事は仇には思はれんぞよ

お累「然うとも〳〵、妾やてお庄屋様の事許りは、片時も忘れた事がない

與次「アー然うぢや、人間は他樣のれ世話に成ッたと云ふ事を、忘却れる樣な事ぢやア到底あかん、マア思ひ出さぬ位ゐにして居りやア、必ず忘却れる事がないのぢや

お累「然や依ッて其人、寢るわてお庄屋様の方へは足も向けて寢た事がないわい

ト夫婦は四方山の話しを致して居りますると、ザアーッと雨が降ッて參りました

與次「嬶よエーマア何ぢやあア、結搏な雨やあいかい、明日は又水掛けに困ると思ッてた處へ此雨、ナア有難い事ちやア、あいかいやい、明日は之でマア緩容と一日休めると云ふもの、ナア嬶よ明日は何か一ッ楽らうでナ

お累「サア何か御馳走仕様いなア

ト話しをして居りまする、戸外をばトン〳〵、トン〳〵

○「お頼申す、れ頼申します

お累「ハイ何誰

與次「何を吐すのぢや、誰に貴様物を云ふてるのや

お累「何人か表をバトン〳〵と叩いてや

與次「馬鹿云へ此堀越村へ今頃に表を叩くッてエ、其様な

方より厳しうお達しがでざりますので、お氣の毒様ですが、之から一里餘りお出に成ると旅宿がでざりますよッて、夫までお出あさりませ

○「イヤ然うでもでざりませうが、何分に足弱を伴し旅の空、夫まで足そ延する事が出來ず、雨具の準備がでざらぬ故、滅に迷惑を致します、長うとは申しませぬ、小降りに成るまで万望れ庭の隅をば暫くの間借用申したうでざります

與次「ハアれ氣の毒さんですあア

お累「アーコレ其人

與次「何ぢやい

お累「アノ情けは他の爲あらずと、何うやら足弱を伴し旅と仰しやるが、女の御方でも伴てお出の容子、お前

者が有るものゝい、風の爲雨が戸を叩くのだらう、吹き降りで夫で表を叩く樣に貴樣が思ふのぢやい

お累「然うぢやらうか

又トン〳〵

○「お頼申す〳〵

お累「良人鳥渡待ッてお呉れ、矢ッ張表を叩く樣な……ハイ何誰でございますナ、

○「旅の者でござるが、驟の時雨に出逢ひまして、鹹に迷惑を致しまする、足弱を伴し旅の者でございます暫くの間お庭の隅にても苦しうはございませんから暫時のお宿が御無心申したうござる

與次「ハイ左樣かナ、何うもお氣の毒ですが、此所の村の規約で旅の衆は一夜も泊める事はあらんと云ふ、村

の云ふてぢや通り村の規約で旅の者は泊める事はならんと云ふが、そりや最もあ事ぢやけれども、一泊をばおさせ申すのぢやあい、ホンの雨が止るまで庭を貸して呉れと云ふてやのぢや、況して雨具もない樣子、足弱を伴しと云ふてや依ッて、誰しも旅をして斯う云ふ驟雨に出遇したら、實に困るぢやアあいかへ、情けは人の爲あらずぢやよッて、良人他さんにするのぢやあい、我身にすると思ッて、雨が小降りにあるまで、鳥渡庭まで入れて上げたら如何ぢやい

與次「ム、成程そりや然うぢや、貴樣の云ふ通りぢや、泊めて上げると云ふのぢやない、雨宿りの事あら可いワ、宅へ入れてれ上げ申す事に仕やうか

お栗「然うして遣ッたら大きに喜んでぢやあいかへ

與次「能う云ふた、情けは他の爲ならず、ム、情けは他の爲ならず、能う云ふた〳〵、嬢よ乃公今開けて來る……

……ハイ今開けますお待ちあされ

ト與次兵衛は庭へ下りて、入口をばガラリと開けました

與次「サア何卒此方へお這入りあさりませ、モウ斯う云ふ田舍家でおざりますから見苦しうもござりますが、御厭ひもなくば万望此方へお這入りあさいませ、さう斯うして居る中に雨が止りませうから、サア〳〵這應なく此方へれ這入りなさりませ

○「然らば御免下さりませ

ト這入ッて來た武家は四十格好、足蹈と云ふのは娘さんと見紅て、未だ二八の細眉毛、雪を欺く程の色の眞ッ白

い、目のぱッちりとした美しい娘の子が、後からしとやかに這入ッて來たので、與次兵衛は見て後へ反り返りました

與次「フウーイ嬢よ、マア鳥渡來いやい、コレお累よマア鳥渡此娘をば見て見いやい、マア〳〵如何にも美しいもんぢやあア、綺麗あもんぢやなア、恰で京人形ぢや如何も、エーお累、嬢やいマア鳥渡マア、エーマア是でも女のお子さんや、和女でも女ぢや同玄女で有ッてゐらい遣びぢや、此お子かて和女かて、目鼻も矢ッ張人並に付いて有るのぢや、ナア和女見た樣な化物をば、嬢やと思ッて一緒に添ひ寢して居たかと思ふと、ホ、ー慄と爲るわい、ヨー嬢明日から山歩きいナ

お累「何でぢやい

與次「狩夫が猪か熊かと思ふて、鐵砲で討つぞ

お累「馬鹿な事を云ひないナ

與次「サアお客人マア〳〵庭の隅で其様な所に立ッて居るすッちやア……マア此方へお上り、囲爐理に火が有りますからサア〳〵、オーマア姐さん氣の毒な、雨でビッシリ濡れて、サア〳〵囲爐理の此火で袖をば御あぶりあされ、遠慮ウあしに、貴郎も胡座ア組んで此所で取煖て、濡れた所を乾しあされ、マア〳〵可愛らしい手々やなア、嬶よ此お手を見ろ、アー怜で何うもエー……併し貴郎は何處から何方へのお出に斯様な所へさしてからに、お通り掛りに成りましたので

○「ハイお尋ねに預かりまして誠に恥かしい事ながら、私等親子の素姓をば申し上げますから、お聞き下さりませ、何隠しませう私は京都大内に守護致しまする禁裏北面の武士、松本丹下と申する者でざる、是なる娘をば玉菊と申し、上様へ御奉公に差し上げたる所、殊の外上様の御氣に入り、御側勤めを致して居りましたる處、傍々の者の妬みで遂には御所を追放なり、已むを得ず是なる娘を伴れ、此堀越村に知己有りし故、尋ね参ッたる處死絶えて跡方も是なく頼みの綱も切れ果て如何はせんと思案に暮れ、不圖思ひ出せしは是なる玉菊を育て上げ呉れし乳母の在所は、偖か加太粟島と聞き及びしにより、夫へ便りらんと是まで参りし道すがら、只今の大雨にて御宿

を御無心申せしは、斯ある譯でございます

奥次「成程然うでございますか、そりやァお氣の毒あ、併し夫で話しやァ判りましたが、夕飯は未でしやうナ

丹下「ハイ未だ夕飯は喰ますでござる

奥次「喰むの喰まんのと、然う六ケしう仰しやッては、私等には解りませぬ、未喰はんあら喰はんと仰しやッて下さいませ、未ですあアへ、、オイ嬶よお累よ未其夕飯をばお喰りあさらん樣子だ、何もないが雜炊此方へ持ッて來い、鍋口提げて來い、其處にお膳が有ッたらう、然う〳〵夫を此方へ持ッて來い、サアア丹切さん〳〵お喰りあさりませ、モウ貴郎方は都の土地にお出あされて、旨い物をば澤山召し喰ッて

でざるぢやらうが、斯う云ふ草深い所でござる故、中々お前さん方の口に適ふ樣な物はでざりませぬが此處の之は名物です、ぴちよたれ雜炊之をマア一膳お喰りあさりませ

丹下「千萬忝なう存ます、仰に從ひまして辭退を致さず厚皮しくも頂戴仕つるでござる

奥次「然う六ケしう頂戴てエお事を云はずと、喰ふと淺さりと云ふて、喰ッて貰ひたうございまするなア、サアお喰りあさりませ

丹下「コリヤ娘其方も御馳走れ申せ

玉蔦「ハイ、伯父樣大きに御馳走樣でおざりまする

奥次「アラーイ……

お累「何ぢやいナ大きな聲出して、喫驚する、

與次「嬶ア此子が物を云ふたわい

お累「其子かッて物を云いいでなア

與次「乃公唖やと思ふて居たわい、エーマア伯父さん大きに御馳走さんなんて、如何もエー可愛らしい者ぢやあいかい

與次兵衛は元朝に驚でも初音した樣に思ふて居ります

與次「サア〳〵何卒遠慮あしに澤山喫て下され、お給事も此樣な不骨な者で旨うはござりますまいけれど、精出して遠慮あしに喰て下され

丹下「有難う存します、然らば頂戴仕ります……アー此シワ〳〵そるのは此は何でござるナ

與次「エーそりや五形草の蔭干を刻み込んでござります

丹下「和藥屋見た樣でござるナ、此子バ〳〵するのは何でござるかナ

與次「そりやア粘土が少々這入ッてます

丹下「ハ、ア此がサ〳〵するのは何でござるか

與次「エー夫は藥が刻んで入れてござりまそる

丹下「藥喫ッて泥喫ッて後で左官を喰へば、腹の中で瓦い壁が出來るでござりませう

與次「申戯な事、モソッと盛ひませうかナ

丹下「イヤモウ一膳で澤山でござる、アーア旅は憂いもの辛いもの、可愛子には旅をさせとは、アー能く申した事でござる

與次「然う愚痴を云ふては困りますなア、併し然理アあい此樣な物では口に合ひますまいが、マア我慢あすッて今夜私の方へ泊りなさい、明日に成ッたら引割

飯でも炊いて上げませう、アーコレ嬶よ、此お膳や何か其方へ取片付けて仕舞へ、迚も此樣な物は能う喰ひなさりやアせんよッて、と云ッて何もお上げ申す物もないから、マア寐さしてお上げ申す事にしやう、コレ嬶よ奥へさして此丹切さんのお床を取ッて其隣りへ此玉虫さんのお床を取ッて……

お累「其人蒲團が不自由やよッて一緒にお父さんと寐る樣に、床を取ッたら如何やエ

與次「イヤ〳〵そりや不可ん〳〵、お父さんやッて娘さんやッて、ナア旅で疲れてやよッて、一緒に寐さしたりすると疲が休まらん、別々に寐所を設ッてお上げ申せ

お累「斯うかい

與次「然うよ〳〵、乃公の寢處を此所へ設ッて呉れ、然うして和女は今夜其牛部屋か、藁の上へ緩容と寢エ

お累「阿房云ひ給ひの上に寢たり、其樣な事が出來るものかお前と一緒に寢るわい

與次「馬鹿云へ何を吐すのぢや、能う物を考へて見い、和女と乃公と此所で一緒に寢て見い、エー年頃の娘さんだ、ナア可怪げあ了簡を出しては大きに不都合ぢや、だから和女と乃公と別々に寢やうと云ふのぢや

お累「イエ夫だかて蒲團がありやせぬ、サア彼此云はんと此所へお寢

與次「和女ア何するのや

お累「仕かけた此草鞋、之だけ妾や遊ッて置く胸算だ

與次「氣のない奴ッて仕樣のない者ぢやなア、旅の御方が

泊ッて居あさるのに夜業あぞを爲てゝ見い、手足を延して寢られるものぢやアありやアせん、然う云ふ虚ゝ和女ア氣が注かんとッて何もあらん、夜業てェな事は疲せ〳〵、サア寢やう〳〵

お累「コレ良人

與次「何ぢやい

お累「れ前コレ燈火消して如何するんぢやい、眞暗がりぢやが

與次「知れた事を云へ、火を消したら暗黑に成るのが當前ぢやい、火を消して明い位ねあら燈火は要りやアせんわい、今夜から節儉をする胸算ぢや

お累「道理の合はん事許り云ふてる老爺ぢやあア、れ前や妾は暗黑でも勝手を知ッた宅やよッて、便所に行くのは差支へはあいけれど、旅のお仁は勝手知らぬ宅に泊ッて、萬一目を醒して便所へ行くと云ふたからッて、暗黑で行けるもんかい

與次「可いわい此所に割木が有るよッてに、萬一彼衆が便所へ行きたいと仰しやッたら、此割木で和女の目をポンと擲らア、然うすると和女の目からブイと火が出るわい、其明りで便所へ行ッて貰うたら可いわい

お累「阿房云ひ其樣な物で目ェ擲られたら、目を眩して仕舞ふワ

與次「目ェ眩して死んでも可いわい

お累「馬鹿な事をお云ひナ

與次「サア〳〵、寢よ〳〵、早う寢ェ〳〵……

暫くすると與次兵衛

「嬶ア何してるのぢや

お累「お前彼姐さんに最前から可怪ぁ目使ひをして、事に依ッたらお前彼姐さんに……

與次「其様な事を云ふあい、其様な事をするものかい

お累「否々、助倍やとッてに當にならん、夫でれ前の○○へさして、妾の○○の紐をば括り付けて置くのや

與次「其様な馬鹿ぁ事をすナ、サア〳〵、早く〳〵……嬶ア寢たか

お累「然う喧し云ふてやッたら寢られやせんが

與次「早う寢よと云ふのぢや

お累「今寢よと思ッてる所や

與次「思うて居んと早う寢ェ

お累「思ッたり寢たり一時に出來るものかいナ、烏渡便處へ行ッて來るッ

與次「化代ぁ奴ぢやなア、實間便所へ行ッて置かんかい

お累「日が暮れて行たけれど、又行きたうなッた

與次「仕様のない奴ぢや、實間小便して置いたら、夜間小便しに行かん様にせェ、サア早う行て來い……

お累は起きて便所へ行く、後に與次兵衛

「同し女でも、今夜泊ッた姐さん、ェー餘ッ程美しい者ぢや、宅の嬶は餘ッ程面白い顔ぢや、嬶が寢をッたらソーッと……ゐらいはチンチリガンで……オイ〳〵お出た〳〵

お累「コレ良人

與次「何ぢやい

お累「れ前寢所で何で躍ッてた

與次「和女又暗黒で躍ッて居るのが見ゑるのかい

お累「見ゑいでもあア、何がチンチリガンで

與次「怪代な奴やあア

お累「何が怪代な

與次「モウ可いサア〳〵早う寢へ〳〵

喧しう云ふて、與次兵衛は心に豫想が有りましたが、豈の勞れで忘れてグーッと寢入ッて仕舞ひました、女房のお累も共にグー〳〵と寢て居りましたが、彼娘の子も何思ひけん、寢所から飛び起きて

玉菊「伯父さん、伯母さん、鳥渡起きて下され、伯父さん伯母さん鳥渡起きてお呉んあされ、お父さんが冷たうあッてやッたわいなアー、コレ伯父さん起きて下されェあアー

與次「ア、、アー如何したと

玉菊「お父さんが冷たう成ッてやッたわいなアー

與次「エーッ何ぢや、タ、丹切が冷たうあッた、サア腦動や〳〵、お累よソレ見い何で燈を消しやがッたんぢやいい

お累「何で消したッてお前が急に節儉すると云ふて消したんやワ

與次「ヤイ假令乃公が消して置いたにもしろ、後に廻ッて火を點そが女房の役ぢや、馬鹿奴ッ

お累「何云ッてるの

與次「大變だ丹切さんが冷たう成ッたと、早う火を點せ、是やよッて旅の人は迂濶に泊められんと云ふのぢやい、夫に和女がヤア情けは他の爲あらず、他の身に

爲るのぢやアない、我身に爲るのぢやと、でてくさ〳〵吐しやアがるに因ッて、此樣な事に成ッて仕舞ッた、行燈此方へ持ッて來い、イヽヤ明りを持ッて來いと云ふのぢや……ヤー丹切さんへナアー〳〵

玉菊「お父さんエなアー

與次「丹切さんエなアー

玉菊「お父さんエなアー

與次「嬶ア和女も呼ばんかい

お累「丹切さんエなアー

玉菊「お父さんエなアー

與次「お父さんエなアー

お累「お前がれ父さんてまが有るものかい

與次「ムヽコレ嬶ア、何か藥はないか、水を持ッて來い、

何を愚圖して居やがるのだ、汲んでたら暇が居るわい井戸ぐち持ッて來い

お累「サア〳〵瓦人水を持ッて來た

與次「好し來た、ウワー何ぢやい嬶、送方もない辛い水ぢやナ

お累「オヤ瓦人勘忍してお呉れ、周章て醤油汲んで來たのぢや

與次「何をするのぢや早う水を持ッて來い

お累「サア瓦人、水サア〳〵

與次「ヨシ〳〵、プウー（水を吹く音）アーゑらい酸い水ぢやアこりやアやあア、嬶ア何ぢやいこりやア

お累「瓦人そりや鐵醤ぢやッた

與次「何をする周章るない

お累「サア瓦人

與次「好しヤ、　プウー〳〵、丹切さんェあアー

玉菊「お父さんェあアー

ト呼べど叫べど到頭呼吸は絶れて仕舞ひましたが、　松本丹下は白い目を剝いて歯を喰ひ結ッて、　黄泉の客となッて仕舞ひました、　娘の玉菊は父親の死體に取縋ッてワーッー泣いて居ります、　與次兵衛夫婦は途方に暮れて

「こりやマア如何したもんぢやらうあア

ト云ッてる中に、　夜はホンノリと明けて參りました、　與次兵衛は早速村方へ此事をば申して出ましたが、　素より旅の者は泊める事はあらんと云ふ規約を破ッて泊めましたのも、　與次兵衛夫婦の親切で泊めたのでございます、　此與次兵衛夫婦は評判の正直正道の者でございまする故

悪氣が有ッて泊めたのではなく、　親切から泊めたと云ふ事故、　何の御咎めもございませずに、　之より丹下の葬式もそこ〳〵に致しましたが、　後に殘ッたのが娘の玉菊でございまする、　父の死去に目を膨して、　明けても暮れても泣いて許り居りますから、　與次兵衛は慰めまして

「アー是も何ぞの因縁であらう、　私も親兄弟はあし、只獨身で居た者あり、　又お累も親兄弟もなく、　獨身で居た者、　夫をお庄屋様が媒人で、　夫婦にして下すッた處へさして、　親もあければ兄弟もない一人の娘が、　私の宅お居にやアならぬ様な事に成ッたも、　是も何か因縁の端であらう

ト云ふて二人の中に出來た實子の様に思ッて、　玉菊と云ふ様な六ケしい名も付けて置けませんから、　お玉と呼び

まして、世間の体裁では都へ奉公に遣って置いたと云ふ樣な事にして、與次兵衛夫婦は至って可愛がって居りましたが、何しろ堀越村と云ふ所は、草深い處でございますが、斯う云ふ草深い所に此樣な美しい娘の子が、一人ヒョコンと出來たのですから、實に塵芥場へ鶴が下りた樣なものです、サア村の若い輩等は是から此れ玉に皆んな肩を入れませうと云ふ、極滑稽のお話しでございますが、鳥渡一ト息致しまして、引續いて申し上げます

其下

偖て八ッ茶時分に成りますると、畠の中央へ皆若い者が寄り合ふて、崖端長四郎、お塩梅喜兵衛、まったりの又助、鈎鐘權兵衛、半鐘茶無吉、狸の太兵衛、れたゝの太助、籔際茂兵衛、そんぢら惣助、ゞ手重助

甲「皆來い〳〵

乙「何ぢやい〳〵

甲「今度與次兵衛の宅へ都から戻ッて來たと云ふ、彼れ玉と云ふ娘、何と美しい者ぢやないかいやい、マア王政復古以來此堀越村には、彼位ゐな美しい娘はないぞよ

乙「然うぢやとも、脊ェは高からず低からず、細りスウ

ソリ柳腰、眉毛でも三日月眉毛で、両方で二三が六日月眉毛、目でも皮皮目で、二二ンが四皮目と云ふのぢや、口元は可愛らしうて

丙「然うぢや〳〵、鼻でも正面に附いて居て

甲「コレ混返すな、鼻が正面に附いてならうて、鼻ゞ斜歪で居ッたら不具ぢや、一寸斯う頬邊に鼈の入る處あんぞは、何とも彼とも云へん愛嬌者ぢやあいかいやい、生れ下りでも長し、生下りの長いのを美女と云ふぞ

乙「然うぢや〳〵、髪の生ねたんあら鬼と云ふッ

丙「迚ひあいは角の生ねたんあら鬼女と云ふッ

甲「彼餓鬼や混返すのに掛ッて居るは、何と美しい者ぢやあいかい、彼娘をば何でも手に入れぬ事にや不可

んぞよ、十町近傍から皆彼娘に肩入れに來て居るのぢや、他村の者に取られたと云ふては、此村の若い者の顔が潰れるぞ

丙「乃公ア一昨日の晩も行ッたら、表が閉ッて居たわい

甲「留守かい

丙「留守ぢやあいのぢやい、肩入れで門口が一面詰ッて居るのぢや、表の戸に大入にて場所でさあく候、と書いて有ッたわい

甲「阿房吐せそりや人寄席ぢやい

丙「土臺貰ひ物で支へて居るなア、豆持ッて行きをる奴も有れば、又は乾物を持ッて行く奴も有るし、生魚持ッて行く奴も有れば、盤物を提げて行く奴も有り、餅搗いたと云ふて持ッて行く奴も有り、菓子持ッて

行く奴もあり、又鮓拵へて持ッて行きをる奴も有るかと思ふと、菓物を持ッて行きをる奴もあり、押入の戸に仙過一枚へ南京イヤ〳〵と書いて張ッて有ッたぞ

甲「馬鹿云ふナ、そりやア地藏祭りぢやい、併し彼娘子手に入れおんだら、此村の若い者の不名譽に成るから、何でも一ッ彼女を旨く口說落だい者ぢや

乙「ふゝ、然うしたら何か此所に此ん丈集ッてる者で、お玉をば口說落した者が誰もないか

甲「誰が有るものか皆肩入れをして居るかッて、諾と云はした者が一人もないのぢやい

丁「ハーハゝ、不可んあア、モウれ玉ア最前に手に入れてる者が有るのぢやい

甲「權兵衛貴樣はれ玉やッてる者知ッてるか

丁「れ前方知ッてるか何てな事を云ふてるのは大手遲れや、最うとうにお玉一命でもと云ふ情郎が出來て居るのぢやわい

甲「ハイー……イヤ聞くのは乃公ア初めてぢや、權兵衛誰が手に入れてるのぢや

丁「そりやナア彼ウ……聞かして遣らうか

甲「イヤ聞かして呉れ、誰だい

丁「其ウ……と云ふのンナア、乃公（指で一寸鼻を押ゑて）自らぢや、我輩小生僕

甲「迂多〳〵云ふない

丁「何で

甲「何でッてお玉の情郎が、貴樣が出來て堪るものかい

丁「オイ云らい失敬な事を云ふてやあア、貴様が出來て堪るものかッて、何で乃公がお玉の色が出來んのぢやい

甲「れ玉の情郎をしやうと思ふのなら、モッと目鼻が滿足に付い居らア、汝の顏何て目鼻の見當が間違ふて居やがる、色事しやうとは鐵面皮い

丁「オー乃公の顏何樣な顏ぢやい

甲「然うぢやあア、竹簞の糠漬見た樣な顏ぢやい

丁「オイ格外人を馬鹿にするおい、顏ゞ如何あらうとも色事と云ふ者はあア、顏でするのぢやないて、氣前とあア眞實と、一ッは呼吸でやるのぢや、なア乃公顏で色事せんのぢやい

乙「云らい事云ひをッた、羽織の紐で胸ですると云ふの

丁「何かの〇〇でするのぢや

甲「知れた事云へ、夫でせいで何で色事を爲る者かい

乙「蜻蛉ア首筋でするわい

丙「然うや〳〵魚は腹で

甲「要らん理窟許り吐してけつかる、何う云ふ所からお玉と良い中に成ッたんぢや

丁「先日の事ぢやッたが與次兵衛夫婦の留守をば乃公ゞ考へて、デ、門外を乃公が鼻唄々ふて通ッた、スルと表の入口をガラ〳〵と開けて、「オヤ其處へお行きるのは釣鐘の儘兵衛はんどすやあいかへ、「イヤお玉はんどすか「左樣どす……

甲「何ぢやい氣味の悪いドス〳〵て

丁「ム、之か之は京の女の言葉ぢや、総て京の女いおト〜をどすと付けて云ふわい、之が京言葉ぢや、お玉が「何で人の處の門をば素通りお爲いるのや、這入ッてお呉んあはい」と云ふたから「與次兵衛さんや お累さんが在宅かェ」と乃公が尋ねた「お父さんも お母アはんも留守どす「左様あらマア「オヤれ父さんやお母アはんが留守ぢやと、貴郎這入る事出來んのどすか「在宅でやッたら寄せて貰ひますけれど、留守の處へ這入ッて私が遊んで居たら、人の口には戸が閉てられぬ、壁に耳あり徳利に口あり、硫黄にはあ。あり楢盈にめ。

甲「そりや何ぢやい

丁「和女の様あ美しい娘さんが、一人留守番を爲てお居る處へ、私見た様な此様あ屁茶剣れでも這入ッて、遊んで要らん疑ひを受けてもならんよッて、與次兵衛さんやお累さんの在宅や時寄せて貰ひますマア……と云ふて乃公ア通り過やうとすると、乃公の袖を引いて「何でやすねェ、貴郎に嫁はんの有る軀やあし、妾に嫁さんの有る軀やなし、離れた者同士が一緒に成ッて何の彼のと浮名を立てられたら、妾や嬉しいと思ふて居ます、けれど此様あ三平二満と浮名が立ッたら、貴郎が体裁が悪いと思ひあさるだんのん〳〵どす

甲「何云ふてけつかる、薩張り判らんわい

丁「お前判らんか知らんが、乃公ト能う判ッて居る

甲「汝が云ふに汝が解らん事が有るかい

丁「然や依ッてに乃公ア能ら解ッて居ると云ふてるのや
「れ父さんやお母アんが在宅でなうて、も何卒這入
ッてお呉んなはい、お這入り「左樣ならお這入る、
てあア夫から乃公がお這入ッたと思ひい赤、デ乃公
ア庭へ一寸御立ッて居たら「此方へ御上り」と云ふ
てやから乃公アお上がッたんや
甲「其樣あ化代あ物の言ひ樣するあい
丁「夫から乃公ア臺所へ上ッた「此處に火が有るよッて
之へ來ておわたり、其樣あらおわたる
甲「化代あ物言ひする奴
丁「スルと乃公の手をばキュッと押ゑをッた「れ玉さん
何をお爲へる「一が刺して爲て居ますのや「其樣あ
ら私二が刺した「三が刺した「四が刺した「五が刺

した「六が刺した「七が刺した、スルと乃公の手を
グッと捻り居ッて「ハチが刺した、乃公ア「痛アー
イ」と云ふたら、何うで妾が抓ッたら痛うおますや
らう「誰が抓ッたッて痛いわいな「殿達は荒仕事を
爲あさるのに、割に貴郎はフウワリ柔いお手や、此
れ手何處へ一遍れ遣りんか「おやり名古屋は城で持
つ……
甲「フ、、、二〇か爲てけつかる
丁「能う其樣な事飯章魚やあア」と云ひをッた「ろらい
和女菜種豚や「何で妾は三平二滿や「誰が三平二滿
やと云ふてまそ、貴郎今三平二滿と云ひあすッたん
やあいか「イ、エ和女を菜種豚やと云ふてまそのや
「何で妾ア菜種豚や、血イ狂はしやと云ふ事でおます

「何も章魚の云ひ返しを豚でせんかて宜しいがあア「ゑらい和女蝶蛸やあア「和郎ゑらい鰯やなア「和女ゑらい鰯やあア、和郎ゑらい厄鯛やあア「和女ゑらい黒鯛やなア「鮗の身やあア「鯨やあア「雑魚やあア

甲「鰈やあア……

甲「何を吐してけつかる、魚盗しぢや

丁「スルとお玉が「權兵衛さん和郎其様に程の良い事許り云ふて、勢出して妾をお嬲り「おぶりでも迷子の札でも札入でもありやアしません、お玉さん和女はんが云ふてや事そりやア眞個かい「何の主に嘘吐きますものかい「主と云ふたら誰や「お前はんでおますがナ「フム、夫ぢやア可愛と思ふて呉れてかへ「可愛と思はいで、女の口から恥しい、是丈の事が云

へますものかい、三千世界に又と再び此様な可愛人が有るものかいあア……

甲「トれ玉が云ふたか

丁「云ふたら……

甲「何ぢやい

丁「フ、、、夢……

甲「アッ長い夢見をッた、此阿房が人を馬鹿にしてけりかる、乃公ア眞個かと聞いて居たのぢやトワア〳〵云ッてる處へ向ふの方から、鎌を振り廻してやッて來ました

「ヤア皆んな集ッてるのかい

甲「誰かと思たらアパッの茂兵衛、何ぢや嬉さうにニタ〳〵笑うて鎌振り廻して、何して居るのぢやい

茂「オイモウお玉の事は諦めて仕舞へ

甲「何故

茂「へ、、今お玉諾と云はしたへ

甲「アッ又一名此様な奴が出來て來た、諾と云はさうと思ッて居るのぢやらう

茂「イ、ヤ諾と云はしたんぢや

甲「茂兵衛お玉を如何して諾と云はした

茂「乃公ア今地蔵堂の後でお玉の通るのを待ッて居た、處へお玉が空の辨當提げてやッて來をッたよッてに「サアお玉今日こそは和尚直の勸化、先日中から村の若い奴を以て度々色善い返辭を聞かして呉れと云ふても、只の一度も返辭がない故、今日はお前の此所を通るのを張ッて待ッて居たのぢや、サア諾と云や

可し、厭と云へば是非がない、此鎌を以て存命ては置かん、諾と云ふて承知をするか「サア夫は「厭と云へば殺さうか「サア夫は「サア「サア〳〵

甲「こりや其様な無茶するない、乃公の辨當破ッて仕舞ふた

茂「其様な所へ辨當置いとくない

甲「然うして茂兵衛如何あッたへお玉は

茂「エーナア喧嘩は打擲くが得ぢやて、色事は嘘して掛る方が早いせ、其處が流石未通娘「妾の様な此様な三平二滿でも、親切に貴郎が云ふて呉れてやので、諾は諾ぢやけれど斯う云ふ往來の有る所では、お話しも出來んよッて、貴郎が信實夫が誠なら、爽の切

戸を開けて待ッてますよッてに、必ず忍んで來てお吳んなされ、臺所の次室が妾の室やよッて屹度來てお吳んなされ、若や和郎が妾を待たして置いて僞を云ふてやッたら、此德ぢは捨てゝ置きやアしません淵川へ身を投げて幽靈に成ッて化て出ますよッてに必ず其胸算で旁々今夜忍んで來てお吳んなはいヨ、茂兵衛さん嘘を吐くの厭アーェ……

甲「ハイー、ゑらい事を造りをッたせ、茂兵衛サア前脫ひに酒の五升位ゐ馳走れ〳〵

茂「オー可いわい、酒五升と鷄肉二羽位ゐも饗應て遣るよッてに、乃公に從いて來い〳〵

大勢の奴は茂兵衛の後から喰ひに掛ッて付いて歸りましたが、夫に引替へてお玉は殿の樣な涕を溢して、宅へ泣

いて歸ッて參りました

お玉「お父さん如何しやう、お母アさん如何しやう、如何しやう〳〵如何しやう

奥次「何ぢやい〳〵如何したんぢやい、又泣いて戻ッて來たのか、アー四郎兵衛の處の赤犬に又追ッ駈けられたのぢやあア、ムー、然うかお玉、泣いて居ては解らん如何爲たんや

お玉「イ、ェお父さん然うや無いので

奥次「然うやないッて、如何爲たんぢや

お玉「今地藏堂の裏を通ると、アパ。の茂兵衛が地藏堂より飛んで出て、今日こそ和尚直の勸化、諾と云やアヌし、厭と吐すあら生けて置かん、此鎌で殺して仕舞ふと云ひをッたよッてに、妾や怖いので諾や

と云ふた

與次「エーッ……諾やと云ふた、然うして如何した……

お玉「アノ斯う云ふ往來の處でお話しも出來んよッてに、今霄切戸を開けて待ッて居ます、忍んで來てお呉んあされ、臺所の欲宝が妾の居間やと云ふた故、今夜は是非忍んで來るであらう、お父さん如何しやう如何しやう、如何しやうー……

與次「ム、然う云ッて其場は逃れて斷ッて來たか、ム、ゑらい奴や、流石はお玉感心ぢや、能う云ふた〳〵能う云ふた

お累「何ぢやいな瓦人、猫が鼠捕ッた樣に、然うしてお前茂兵衛ダ忍んで來たら如何する胸算ぢや、エー瓦人

與次「案じな先日博勞した牛が鳥渡手荒いよッて、あれをばお玉の寢處へさして寢さして置く、然うすると茂兵衛が忍んで來るわい、とお玉やと思うて忍んで行く、ト牛めが角で喉でもグイッと突きをる、茂兵衛は死去て仕舞ひをる、然うすりや村の若衆に以后の見懲にあるのぢや、お玉案ぢゃ〳〵乃公に任して置けェ

與次兵衛は是から牛部屋へ這入ッて、寐て居る牛をば引張ッて、れ玉の室へ伴て參りました、牛はモー、何時も藁の上へ寢て居るのが、蒲團の中へ寢さして貰ふのですから、心善うペタ〳〵〳〵と寢をッた、上から蒲團一枚振り掛けて

與次「斯うして置きやア之で可い

ト與次兵衛夫婦の中へお玉をば入れて寢る事に致しました

たが、其樣な事とは御存知あいのはアパ〇の茂兵衛です

茂「ヤイ乃公一寸行ッて來るよッてに可いか、酒精出して飲め〳〵酒が無くあッたら取りに遣れ、デ鶏肉が足らにやア定の處へ然う云ふて、最う一羽も絞めて貰へ、行ッて來るぞ

皆々「ヤア茂兵衛お樂みで

茂「穂漏て呉れるなへ……サア之から向ふへ行て切戸が開いて居れば結搦ぢやが、若も切戸が閉ッて居るてエあ事ぢやと、酒は飲まれた鶏肉は喰はれた、肝心の事が出來ぬと村の若衆の可い笑ひ草に成るのぢや何卒切戸が開いて居れば可いがあア……イヤ云らいは切戸が開いてるぞ、へ、、是でこそ村中第一等の色男の茂兵衛さんぢやい……オヤ椽前の障子が閉ッてるか、先障子も斯ら開けるは……オヤオヤ眞ッ暗黒ぢや、お玉の室は臺所の次の室とけつかるわい、ウフ眞ッ暗がりで齒張り解らんが、

茂兵衛は探り廻してお玉の室へ差してやッて參りました

茂「お玉さん來たせ〳〵今來たせ、モッと早う來る胸算ぢやッたが、村の若い衆がドヤ〳〵皆んな遊びに來をる、お前の處へ乃公ア來るッてお事を次伸にでも云ふたら、皆恪氣深い奴で剛弄して出ぶれんよッて漸々首尾して今來たのぢや、定めし待ち遠で有ッたらうナア、お玉さん〳〵……

牛「フウー

茂「へ、、お玉さん來たせ、ナア太息吐いてやるア、可愛男の群がすりや蝶々の簪拔けて出る、ナア日が暮

れたら直に來てやと思ッてる處へさして、乃公の來やうが遲い、何で此樣に遲いのぢやいなアと、案玄て居てゝや處へ乃公の聲がしたよッてに、夫でフウーと太息吐いてやか、お玉はん耻しい事はありやせんがナ、エー燈を點して置いてやと可いのに、お玉さん何處に居てや齒ッ張り判らん……

探ッて見て

茂「オヤ大きな艇やあア……、ハ、ア成程寢太りと云ふのやあア、お玉はん假令和女が寢太りであらうが、艇艓首であらうが、夫をば愛相を盡す樣な茂兵衛ぢやないせ、惚たはの字に外がない、ナアお玉さん默ッて居てやナ、何とか彼とか物を言ひんかいあア、マア蒲團一枚取らう

ト蒲團を取ッて又斯う探り見て

茂「オヤお玉さん尙だフランケット被て居てトやナ、お玉頭何處や

ト又探ッて今度は尻尾を捉へ

茂「オヤお玉さん下髮か、感心〳〵、ナア壹間は鴛鴦やとか奴に髮を結ふて有るけれど、始めて逢ふ殿御だと思ふて、御所で動めてた時の其事を思ッて、下げ髮とは有難いあア……オヤお玉何で其樣なに下げ髮ヒヨコ〳〵振りや、ハ、ア鳥渡藝道有りやナ……オヤお玉さん蒲團被ッて寢てやよッて髮附が湧いてるがニチヤ〳〵と……オヤ臭ッ、化体あ臭氣する髮附やあア

餘り撫で廻すので尻尾が茂兵衛の額口をピシヤンと撥さ

ました

茂「れ玉何するのぢや下げ髪で前額を擦ッたり何のしてお玉前額が髪附抹けになッたが、れ玉お頭は何處ぢや……アー有ッた〳〵感心々々、ナア畫間は燒附の簪を刺して居ても、初めて逢ふ殿御ぢやと思ッて一角獸の丸笄、寡婦の質屋へ持ッて行ても、三十両や四十両の金子は貸して呉れる、ナア若や乃公が詰らん時には、お玉さん之片ッ方丈貸してや、ハア持ッてお行き、フ、、、嬉いあア、お玉貸してや〳〵ト角を持ッて搖りました、何ぼ牛でも心が悪いもんですから

牛「モー

ト云ふ辭に、ヤッ茂兵衛は驚きおッて、一散に駆け出し

ました

茂「フワー仁……

ト横筋違に宅へ戻ッて來ますると、若い奴等が大勢ワイ〳〵云ふて酒を飲んで居る眞ッ最中

皆々「アー喫驚した茂兵衛、何ぢやい

茂「汝等より乃公が喫驚したわい、ハア〳〵

甲「お玉の處へ行ッて和郎はお玉を諾と云はしたか

茂「阿房吐せ、モーと云はしたんぢやい

明治二十七年五月一日印刷
明治二十七年五月五日發行　定價金八錢

編輯兼發行者　大阪市南區末吉橋通四丁目八十六番屋敷　大淵涉
印刷者　大阪市西區江戸下通四丁目二百一番屋敷　大原政吉
發行者　大阪市南區久太郎町四丁目七十三番屋敷　島井正之助

版權所有

全

發賣所　駸々堂
大阪市東區南久太郎町三丁目七十三番邸
正英堂

駸々堂出版新刊書籍目錄

紅葉山人著
○袖時雨　菊版　實價二十錢　郵稅四錢

湖山人著
○政治小說　蝸牛　全　實價廿五錢　郵稅六錢

中村春雄著
○探偵小說　一閃影　全　實價三十錢　郵稅六錢

霞城山人著
○賊紳士　全　實價廿五錢　郵稅四錢

井上靈園著
○天明義民傳　全　實價卅錢　郵稅八錢

菊池幽芳著
○春日野若子　全　實價廿五錢　郵稅六錢

全
○無言の誓　全　實價廿五錢　郵稅六錢

霞亭主人著
○三人同胞　全　實價廿錢　郵稅六錢

香樹園主人著
○七變化　菊版　實價廿錢　郵稅六錢

堺枯川著
○惡太郎　全　實價十錢　郵稅四錢

玉田玉芳齋口演
○野狐三次　全　實價卅錢　郵稅八錢

松月堂春玉口演
○肥後駒下駄　全　實價廿五錢　郵稅六錢

玉田芳玉齋口演
○水戸黃門巡遊記　全　實價廿錢　郵稅四錢

石川一口譯述
○血池地獄　全　實價三十錢　郵稅六錢

翁家さん馬口演
○官員小僧　菊版　全三冊　實價卅錢　郵稅八錢

三遊亭圓朝口演
○霧陰伊香保湯煙　全　正價卅錢　郵稅六錢

生駒紳士投
○競忠貞涙華文庫　菊版　實價廿五錢　郵稅六錢

玉川玉燕口演
○水朝惡狐傳　仝　實價廿錢　郵稅四錢

河井一口口演
○押上奇談鶴一脛　仝　實價廿五錢　郵稅六錢

翁家さん馬口演
○戀廼緋鹿子　仝　實價廿錢　郵稅六錢

松月堂香玉口演
○戸田慶二郎　仝　實價廿五錢　郵稅八錢

桃川如燕口演
○木村長門守傳　仝　實價十錢　郵稅二錢

神田伯龍口演
○小金井櫻　仝　實價廿錢　郵稅六錢

翁家さん馬口演
○迷子札　仝　實價廿錢　郵稅六錢

各務春玉講述
○大岡啖猫に小判　仝　實價廿錢　郵稅四錢

宇田川文海著
○雪竹伏見曙　菊版　實價廿錢　郵稅四錢

竹柴修蔵著
○明慈烏反哺講談　仝　實價廿五錢　郵稅六錢

翁家さん馬口演
○廓文庫　仝　實價廿三錢　郵稅六錢

石川一口口演
○駿河細工有田の色笠　仝　實價廿三錢　郵稅六錢

春錦亭柳櫻口演
○旗本五人男　仝　實價廿錢　郵稅六錢

翁家さん馬口演
○祐天小僧　仝　實價廿錢　郵稅六錢

仝
○芳原奇談雨夜鐘　仝　實價廿錢　郵稅六錢

玉田玉芳齋口演
○天代騒動譽の大久保　仝　實價廿五錢　郵稅六錢

仝
○寛政曾我　仝　實價廿五錢　郵稅八錢

玉田玉芳齋口演
○雪間乃若菜　菊版　正價廿五錢　郵稅六錢

石川一口口演
○吾妻俠客新門辰五郎　仝　實價十八錢　郵稅四錢

神田伯龍口演
○正宗孝子傳　仝　實價九錢　郵稅四錢

石川一口口演
○春日夢內津復讐　仝　實價廿三錢　郵稅六錢

玉田玉芳齋口演
○飛鳥山花の曙　仝　實價廿錢　郵稅六錢

松月堂香玉口演
○眞田繊古郷錦　仝　實價廿錢　郵稅六錢

神田伯猿口演
○吾妻小舟衝白浪　仝　實價廿錢　郵稅六錢

翁家さん馬口演
○大島屋騒動　仝　實價廿三錢　郵稅六錢

石川一口口演
○北海奇聞沖白浪　仝　實價廿五錢　郵稅六錢

三遊亭圓朝口演
○荻の若葉　菊版　實價二十錢　郵稅六錢

松月堂香玉口演
○艶紅葉　仝　正價十五錢　郵稅六錢

滑稽談
○速記第一集正直新助　仝　實價九錢　郵稅四錢

石川一口口演
○仝第二集今主寺道三　仝　實價九錢　郵稅四錢

春錦亭柳櫻口演
○仝第三集阿富與三郎　仝　實價九錢　郵稅四錢

川上音次郎口演
○仝第四集薔薇の花　仝　實價九錢　郵稅四錢

宇田川文海著
○士族商業　仝　實價二十錢　郵稅四錢

曾呂利新左衛門口演
○滑稽曾呂利叢話　仝　實價十五錢　郵稅四錢

玉田玉芳齋口演
○三賢明智傳　仝　實價二十錢　郵稅六錢

曾呂利新左衛門口演
○滑稽月宮殿　實價十錢郵稅四錢

五明樓玉輪口演
○觀音經現世利益　實價十錢郵稅四錢

桃川燕林口演
○露の離朝顔物語　實價十二錢郵稅四錢

石川一口口演
○明治模樣三組盃　實價十二錢郵稅四錢

翁家さん馬口演
○講談集　實價十五錢郵稅四錢

仝
○小町娘尊高岡　實價二十錢郵稅四錢

四田川馬石口演
○深川辰己奇談　實價二十錢郵稅四錢

翁家さん馬口演
○天眼鏡　實價十錢郵稅四錢

渡邊千治著
○蘭〻奢侍　實價十二錢郵稅四錢

春錦亭柳櫻口演
○黑手組戶澤助六　實價二十錢郵稅四錢

丸山竹園著
○雪の下草　實價十錢郵稅四錢

石川一口口演
○眼三升舞臺藝　實價十二錢郵稅四錢

仝
○筑摩嵐譽陣立　實價八錢郵稅四錢

仝
○富士の面影　實價八錢郵稅二錢

曾呂利新左衛門口演
○解やらぬ下關水　實價十錢郵稅四錢

翁家さん馬口演
○政談小間物屋小四郎　實價十錢郵稅四錢

曾呂利新左衛門口演
○裏見の葉櫻　實價二十錢郵稅四錢

天秀散史著
○黃昏日記　實價十錢郵稅四錢

石川一口口演
○嫋娜模樣小町松　實價十七錢郵稅六錢

曾呂利新左衛門口演
○滑稽嗅鼻長兵衛　實價十錢郵稅四錢

浮世舍まゝよ著
○探偵小說第一集薄皮美人　實價郵稅共金十錢

美翠子著
○仝　第二集鬼美人　仝仝

島田美翠著
○仝　第三集かたき討　仝仝

仝
○仝　第四集いま釼　仝仝

仝
○仝　第五集小將姬　仝仝

仝
○仝　第六集暴殺事件　仝仝

美翠子著
○仝　第七集つげの櫛　仝仝

蓮嶺舍蓮洲口演
○御誂小柳織　實價十錢郵稅四錢

翁家さん馬口演
○左甚五郎美術の譽　實價十錢郵稅四錢

翁家さん馬口演
○速記玉手函　實價十錢郵稅二錢

曾呂利新左衛門口演
○噺の種　實價十二錢郵稅四錢

仝
○黃金包　實價十錢郵稅四錢

三遊亭圓朝口演
○改良落語　實價十二錢郵稅四錢

三味道人著
○女刺客　實價十五錢郵稅四錢

贅六庵主人著
○相合傘　實價十錢郵稅四錢

宇井川文海著
○懇親會　實價十錢郵稅四錢

西村天囚居士著
○小夜物語　實價十錢　郵稅四錢

欠伸居士著
○幼おじみ　實價十錢　郵稅四錢

岡野半牧著
○ぬれ荻　實價十錢　郵稅四錢

仰天子著
○芦田鶴　實價十錢　郵稅四錢

石心鎖鶴著
○通俗佳人奇遇　實價十錢　郵稅四錢

麗雪主人著
○一しぐれ　實價七錢　郵稅二錢

仰天子著
○雪鳴深山鳥　實價九錢　郵稅四錢

岡野半牧著
○薄の影　實價十二錢　郵稅四錢

万字楼仰水著
○十人斬恨の涙　實價八錢　郵稅四錢

落語家連編輯
○落語集　實價六錢　郵稅二錢

仝
○おもくろし　實價六錢　郵稅二錢

松廼家梅河著
○都々逸源氏卷　實價十錢　郵稅二錢

仝
○滑稽あこはべし　實價十二錢　郵稅四錢

淺河保正編輯
○産育造化機論　實價十錢　郵稅四錢

○大阪全圖　實價七錢　郵稅二錢

渡邊治著
○無爵王　實價廿錢　郵稅四錢

仝
○實錄集人の風　實價廿錢　郵稅四錢

仝
○小説二人探訪　實價廿錢　郵稅四錢

服部誠一先生校閲○飯塚栗太郎著
○教育小説愛兒の旅　實價十二錢　郵稅四錢

紅葉山人著
○紅葉讃書　實價十二錢　郵稅四錢

桃水痴史著
○啞聾子　實價十錢　郵稅四錢

紅葉山人著
○京人形　實價十二錢　郵稅四錢

松林伯圓口演
○北越美人雪夜情誌　實價十二錢　郵稅四錢

櫻南居士著
○慾物語　實價十錢　郵稅四錢

○相馬家紛擾事件　實價廿五錢　郵稅六錢

○明治二十七年當用日記　實價廿五錢　郵稅六錢

○明治二十七年懐中日記　實價八錢　郵稅二錢

仝
○汝所好　實價十錢　郵稅四錢

仝
○小説ありのまゝ　實價十錢　郵稅四錢

江見水蔭著
○花の枝　實價十錢　郵稅四錢

鯉花遊人著
○河内十人斬　實價八錢　郵稅二錢

松月堂春玉口演
○文身奉行　實價二十錢　郵稅四錢

石川一口口演
○積雪操松ヶ枝　實價二十錢　郵稅四錢

上田觀水著
○商事活法　實價二十錢　郵稅八錢

河野惠朋著
○實中算術秘傳書　實價三拾錢　郵稅二錢

○粋の目ざまし　實價二錢　郵稅七錢

大淵涉編著
○新選 發句十万集　竹腰一郎著　實價五十錢　郵稅十二錢

○尺八指南　前野嗽石編纂　實價十二錢　郵稅二錢

○箱頭 勅語 明治祝文演說　淵庵鳥尾小彌太君題字○赤松連城師序文○能辯學會編集　實價廿五錢　郵稅六錢

○能辯學會演說　前野嗽石著　實價廿五錢　郵稅六錢

○鳥瞰 指針 通俗少年演說　中江篤介著　實價廿錢　郵稅六錢

○憂世概言　池田廬州校訂　實價十五錢　郵稅四錢

○文章軌範讀本　尙武道人著　實價十五錢　郵稅四錢

○福島中佐 夢廼令半狂史著 單騎旅行　實價十五錢　郵稅四錢

○秀吟 自在 冠附獨案內　實價廿錢　郵稅六錢

大阪商業簿記學校々長和田昌良著
○商業帳簿 半紙十八錢〔郵〕四錢　美濃廿五錢〔稅〕六錢

○日本商法釋義　法學士成田元衛著　實價四十錢　郵稅十錢

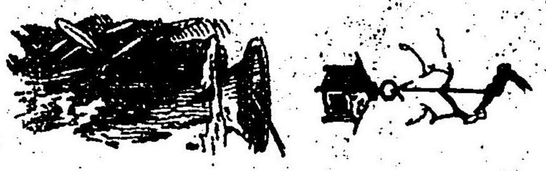
○大阪名勝獨案內　梅河三濱著　實價十二錢　郵稅四錢

○數學早算活法　小林鏡三著　實價廿五錢　郵稅四錢

○萬物製法秘術活法　廣瀨戊一著　實價廿錢　郵稅四錢

○秘法奇術　竹內涉著　實價廿錢　郵稅四錢

○商事活法　上田觀水著　實價廿五錢　郵稅八錢

○作文秘決　遠藤菊次著　實價十二錢　郵稅二錢

○作詩秘決　仝　實價十二錢　郵稅二錢